

# て

## デ(ザイン)と工(作)は 目的表現 要, “お世話”

Keyword : すすめの学校, 肯定命令プログラム, 指導者の責任

原因は、美術への理解不足だと私は考えています。でもその責任のすべてが教師にあるとは考えていません。むしろ最近では小学校学習指導要領における「表現」の「内容」にかかわる曖昧な表記（一定の根拠がなくはない表記なのですが）が拍車をかけているのではないかと疑い始めています。

ただ、このこと中学校学習指導要領第2章第6節美術においては明快です。たとえば「第1学年 2内容 A表現」において「(1) 感じとったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を指導する。」と簡潔明瞭に心象表現の分野を示し、目的〈適応〉表現については「(2) 伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を指導する。」と、質の違いを明記しています。

この際、私は小学校も中学校の文脈にそろえ「造形遊び」を分野として付加（余談ながら私は中学校には「造形遊び」を付加すべきと考えています）し、かつてのように各々の内容を分けて位置づけることを提案したいと思います。このこと、10年前に「図画工作・美術科/重要用語300の基礎知識（明治図書）」に取り組んだ際、その「はじめに」においても触れたことです。

繰り返します。「おもちゃ」を子どもたちにつくらせる際、最終的にはつくったモノで子どもたちが遊ばなければ失敗授業です。一方、心象表現は一人ひとりの「思い」の具体化が最優先であり自分の納得に基づき取り組めばよいのです。したがって、心象表現の指導では「小さな親切大きなお世話」という文脈がありうるのです。しかし、機能性を追求する目的表現はそうはいきません。「失敗」は子どもが寂しいだけです。そのため、目的表現の指導においては、誤解をおそれず極論するなら心象表現とは真逆の“ぬかりなく 緻密なお世話 手をぬくな”との指導スタンスが要求されます。昨今の学校の様子をみるにつけやむにやまれぬ心境での再提案に至りました。



参考文献：石川球太「おもちゃの作り方」主婦と生活社、1984

心象表現／鑑賞

目的（適応）表現／鑑賞

かく／みる



絵画／6年生



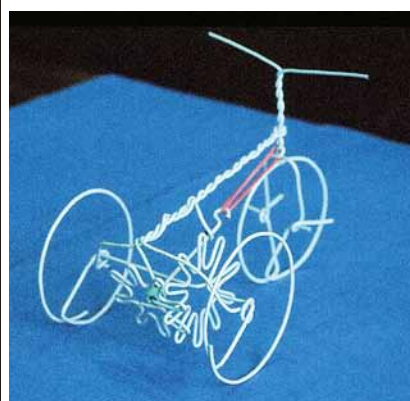
デザイン／学生作

造形遊び

彫刻／5年生

工作（工芸）／学生作

つくる／みる



「めだかの学校」型支援  
否定命令プログラム<sup>\*1</sup>

「すすめの学校」型支援  
肯定命令プログラム<sup>\*2</sup>

\*1, \*2 江崎玲於奈氏の知見。「肯定命令プログラム」における授業時の教師の発問の語尾は「〇〇しましょう」が主流となり、「否定命令プログラム」は「〇〇してはいけません」となる。いずれの発問がより多くのことを考えなければならぬかと、アメリカの教育プログラムと日本のそれを比較したうえで江崎氏からの我が国の教育システムへの問題提起であった。／「週刊朝日／増刊」1992.9.15.





広島大学の学生達が子ども達に提供した“造形遊び”の場（教育学部美術棟にて）